

第57回日本臨床検査医学会学術集会

松村 充*

第57回日本臨床検査医学会学術集会が、2010年9月9日(木)~12日(日)の4日間、東京都新宿区の京王プラザホテルで開催された。宮澤幸久大会長(帝京大学医学部臨床病理学 教授)のもと、「臨床検査の価値」をテーマに、臨床検査が現在直面している倫理、制度、安全、標準化に係わる問題についてディスカッションが繰り広げられた。本会は、学術的にもクオリティの高いすばらしいものであった。一般演題は講演形式180演題、ポスター形式207演題と、400題近い研究報告があり、白熱した討論が各セッションで行われた。

中でも今回注目を集めた発表の一つが、「生命の要、分子モーターと体内輸送：高次脳機能、神経発生、体の左右決定、そして腫瘍の制御」と題した、廣川信隆先生(東京大学大学院医学系研究科)による特別講演である。

廣川先生が目にしたのは、細胞はその形作りおよび機能発現に必要な蛋白および脂質を合成した後、他種類の膜小器官あるいは蛋白複合体として必要とされる部位に、巧妙に送り分けている。この物質輸送の機構はあらゆる細胞で細胞機能の要となっているが、この機構を担う微小管をレールとする新しいモーター分子群 KIFs (Kinesin Super Family Proteins) についてである。多くの手法を駆使したその構造と機能の解析により、物質輸送の機構を解明した。その中の一部 KIF1A、KIF1B β 、KIF2 などが存在し、KIFs は輸送のみならず体の左右決定、腸管神経系の発生をはじめ個体の発生上の重要な現象及び腫瘍形成あるいは、脳の発生、

神経回路形成、学習・記憶等のような生体にとり大変重要な現象を制御しているということを教授されたのである。

また、日本臨床検査学教育学会共催による「臨床検査技術開発に求められる大学院教育のあり方」と題し、大澤 進先生(九州大学)、森田耕司先生(杏林大学)を座長としたシンポジウムが開催

第57回
日本臨床検査医学会
学術集会

テーマ 「臨床検査の価値」——その評価・そして未来に向けて——

会期 平成22年9月9日(木)~12日(日)

会場 京王プラザホテル(東京都新宿区)

会長 宮澤幸久(帝京大学医学部臨床病理学 教授)

【事務局】 第57回日本臨床検査医学会学術集会事務局
〒115-0034 東京都文京区湯島9-31-5 YUJIMA3B15ビル2階 アクセスブレイン内
TEL: 03-3839-5030 FAX: 03-3839-5036 E-mail: jslm57@accessbrain.co.jp

写真

*帝京大学医療技術学部臨床検査学科 matamura@med.teiyo-u.ac.jp

された。演者として、三村邦裕先生(千葉科学大学大学院危機管理学研究科)から「我が国の臨床検査技師教育と大学院教育」として、始めに臨床検査教育の経緯について説明があった。衛生検査技師教育から始まり、2004年には20校ある国立大学(医学部保健学科)が全て大学教育となり、さらにこの国立大学を中心に大学院博士課程前期・後期が設置され、臨床検査技師教育も技術教育から臨床検査学としての学問的構築が成されようとしていることや、臨床検査技師教育の現状、大学院教育のあり方について、提言くださった。特に、大学院教育においては研究者の養成と高度職業人の育成を使命とする必要性や、医療人としての人格そして風格を高め、国際社会のニーズに応える研究心旺盛で問題解決型思考力を有する高度専門職業人として、世界をリードする研究者を養成することが重要であること。医療過誤を未然に防ぐための病院内での危機管理や院内安全対策、そして個人情報保護から情報管理や守秘義務が徹底される流れから、臨床検査技師教育もこのような社会的背景を理解した教育を行わなければならないこと。また、今までの臨床検査技師教育は、正確で精度の高い検査データを迅速に提供するかに重点が置かれてきたが、科学技術の進歩により自動化が推し進められ用手法で行っていた検査が機械に置き換わり、職人的技術が身に付いていなくても検査できるようになったゆえに、今後の教育では今まで以上に検査の意義を理解した検査結果がもたらす情報を科学的な視点で捉え、さらに臨床側へ伝達し、チーム医療に貢献できる能力を身につけさせる教育が必要となってきたことを提言され、より深く専門的知識を学び、幅広い様々な技術を身に付けた大学院教育を修了した人材が臨床検査の現場ばかりでなく教育や研究分野そして企

業における開発分野で活躍することで臨床検査技師の向上に繋がるであろうとご教授くださった。

企業側から「検査機器企業の研究開発に求められる教育と人材」と題し、三村智憲先生(株式会社日立ハイテクノロジーズ)から計測機器の開発や設計の基本的知識や技術について説明くださった。特に開発プロジェクトに参画して、臨床検査機器の評価などを行う上で、臨床検査技師は分析化学や物理化学などの基本的な原理、原則を修得した上で、評価試験を実施することが開発期間の短縮に繋がり、期待されている。企業の研究開発は、多分野から集まる頭脳がバランス良く活動する必要があり、物怖じせず、何事にも積極的に取り組む意欲があれば、十分なフィールドを確保でき飛躍できると期待して下さっているのが印象的であった。病院や検査センターなど医療の分野から離れた分野でも、臨床検査技師の活躍する場所があるということは、無限の可能性を秘めた資格であると再認識できた。

今回の学会は、私も学会発表ならびに運営スタッフとして、古巣の帝京大学病院中央検査部で、同じ釜の飯を食べた技師仲間と共に参加させていただいた。大変であったがスタッフとしての経験は貴重で、担当しなければ気づかないことを勉強させていただき、極めて意義深いものであったように思う。また、学会時期と多剤耐性アシネトバクターの院内感染騒動が重なり、これらがマスコミ対策や学会運営に影響を及ぼすのではないかと緊張したが、何事もなく無事に終了することができた。ひとつのプロジェクトを完成させる難しさと、人と人との絆の大切さを感じた。最後に、本学術集会を運営し、成功に導かれた実行委員、実務委員、ならびに関係各役員の方々に、心より感謝の意を表したい。